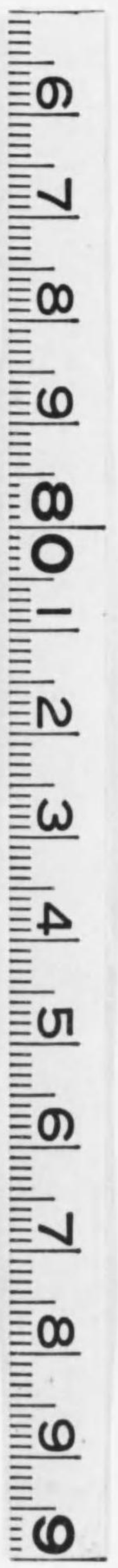


911.168-Y53-2㊦



1200500755825

711.168  
53-2  
㊦



始



25 518

2620

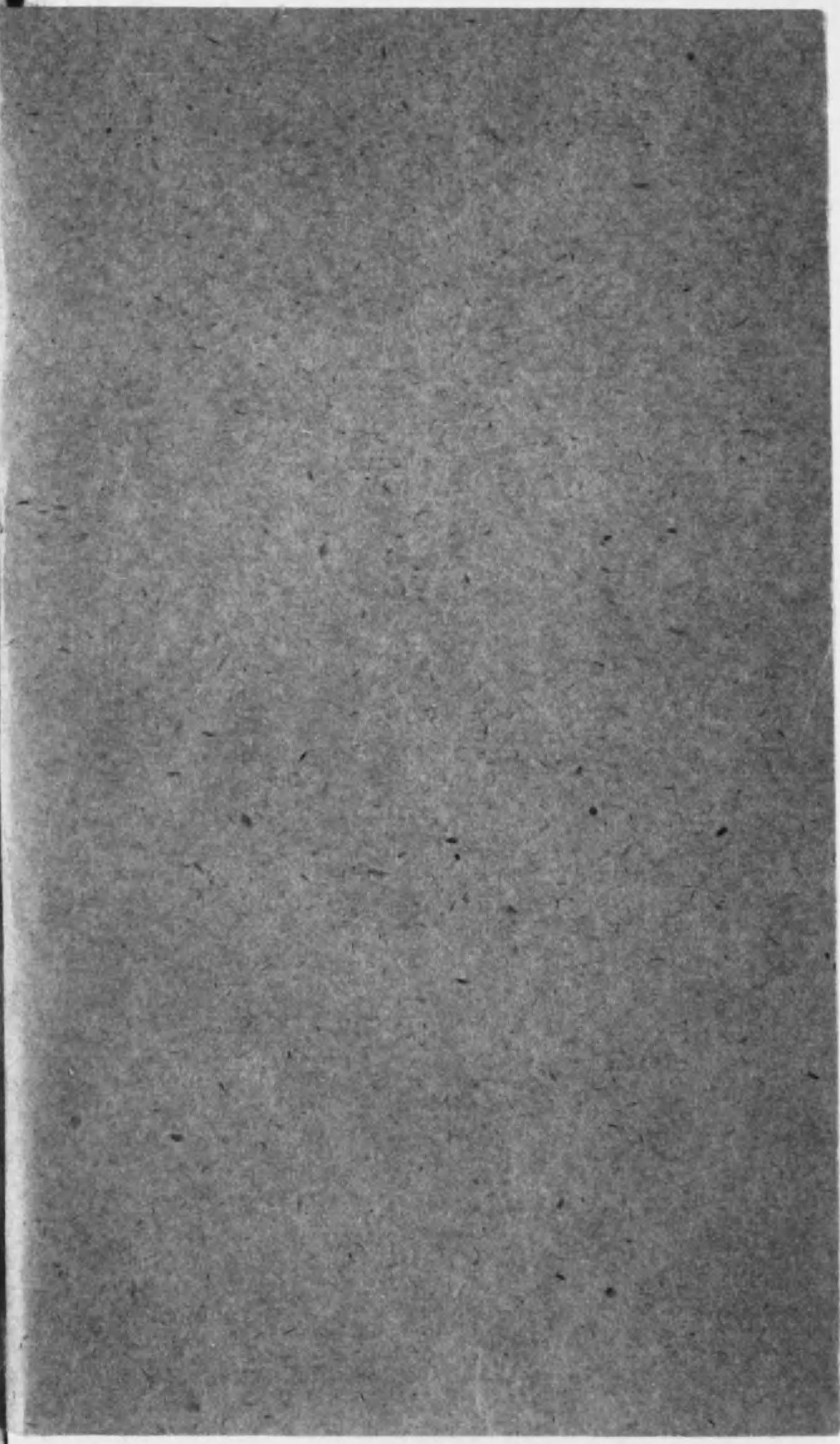


911.168  
Y 53-2  
⑦

抑京名蓮著

弘集  
流  
转

东京不二書房版



~~592-55~~

流轉目次

吾	京	身	新	秋	流
子	·	邊	春	風	轉
：	筑	雜	：	：	：
：	紫	詠	：	：	：
：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：
三	二	一	一	九	一
一	五	七	三		



懐	舊	三九
老	女	四五
滿	月	四九
人	形	五七
追憶の春		五九
遊	女	六七
罌粟の花		七一
梅雨晴		七九
海邊にて		八一

孟	蘭	盆	八五
兒	病	む	八七
稻	妻		九五
寧樂路にて			一〇三
秋	立	つ	一〇九
霜月のころ			一二一
御大葬にあひまつりて			一三一
諒闇の新年			一三五
花まつり			一三九



かくなればげにや嬉しき宿世かな泣きしきのふ  
の涙のあたひ

二

つらかりしきのふの夢を忘れかね涙するほどの  
幸をしる

若くして幸うすかりし昨日の夢の中より放たれ  
しわれ

はるくと遠きをおもふ大空はなつかしきかな  
君見ゆるがに

鈴の緒にすがりて振りしそのかみの我姿見ゆう  
ぶすなの森

おのれのみか父なき子なるクリストをとどめの  
頃によるこびしかな

三

汽車のまごにすてゝのこせし人のかほいくつか  
浮ぶ遠き驛の名

四

はるくくとつゞく鐵路の二筋につらなる末の夕  
空紅し

あきらめにやうやく生きてありし日のわれをこ  
はれて涙さしぐむ

おもひでの心の上に時折はぬれてわびしき北山  
の雨

誰をかもたづねてあはずはるくこ來しが如く  
もうら淋しけれ

勞れたる心のうへをゆく水の流れの音に眠るひ  
とゝき

五



世の中のすべてのものに別れ來しわれに今更も  
の怖ちもなし

六

人と生れ嬉しかりつる夕かな月おもむろに山の  
端をいづ

まことこれいくとせぶりの秋なりや物のあはれ  
をしらで見る月

月の色や嬉しさに似し悲しみのわきて泪す故わ  
かねども

岐れたるふたつの道を一つ得てあやまちぞとは  
誰がいひそめし

月日てるこのもとにこそ我を生め何と隔つる人  
の世の中

七

いくとせを人にふませし我魂をいとしやとばか  
りいまも泣かるゝ

八

天よりか地よりかしらすわが心神よりか來しけ  
ふの安らひ

秋 風

吹けばこそ身にほださるれ秋風はきのふのごと  
くむかしのごとし

秋の風地上にさわぐ木の葉さへ世さへ人さへ咽  
びてやます

九

ふるき夢さめてまことの我世ぞと思ひそめたれ  
秋風の中

落葉ふめば後に人の來るけはひふとかへりみて  
淋しうなりぬ

窓ちかく虫の音きけど悲しまずしきりにこよひ  
落葉ふれども

こよひまたふけてやうやく雨となりこほろぎの  
聲もひそまりにけり

落葉たく火をかこみつゝ吾子たちは大聲あげて  
何かうたへる

あたゝかに相倚る子等と何おもふ外面に吹くか  
風もみぞれも

北豊嶋むかしの我のすみどころいま子とあるに  
亡き人おもふ

こよひまた身に近き人遠きひと思はるゝかな雪  
ふりやます

たるこゝろたらはぬこゝろうちまじりことしも  
ゆくか師走の二十日

新 春

いつの日かあひまつるべきその日ぞと暦をくり  
ぬ新どしの春

へだたりてあるにあふ日もあはぬ日もつながる  
血ゆゑあはれとぞおもふ

元朝や今年初めて春にあふみどり兒抱きて見する紅梅

朝日昇る豊旗雲のめでたさをめでたしといひぬ  
いひ古りたれど

梅の木のあるかなきかの蕾これ大地にひそむ春  
のたましひ

正月はうれしきかもよ子とあれば子等の心になりてのどけし

二つの子ものは云ひえず手を重ねあたへよといふ兄のたべもの

乳すひて母の腕かひなにねむる子を妬しと兄の頭打つなり

朝よりいくつかかへし前かけをまたもよごして  
子の遊び居り

わが上にあれと願ひし父母の情は子等にあるが  
嬉しき

われにいま實の親の生きてあらば泣きて告げま  
しこの安けさを

身 邊 雜 詠

忙がしき用事をあまたもつものを子は遊ばむと  
母を離さぬ

われにすがり生きてあるかと思ふにぞ小さきは  
いとしく乳ふくまする

何ごごぞ親はらからと別れ来て初めておくる涙  
なき日を

たまさかにいとまある日の嬉しさに針もちて見  
つ小さきものぬふ

かぞいろを遠くやりつる心地して友の船出をけ  
ふぞ悲しむ

夢をのせ思ひをのせてゆく人につゝがあらすな  
和田津海の神

消息のあればなければ思ひやる旅の心に時雨ま  
たふる

日に時に離れて遠き旅の人をゆびにあまる港の  
かすく

いくたびか手をあて、見る子の額熱高くして汗  
ばみゐるも

むづかる子なだめすかして醫者に見する胸のや  
せにも心の痛し

看護婦の言きゝわけておとなしき吾子の姿の涙  
ぐましも

この子故この子故ぞと思ふにぞ涙はてなし此子  
のやめば

この子病めば加持よ祈禱といらだてる祖母の姿  
のあはれやつるゝ

病やゝおとろへぬとてほつとする家内やうやく  
明るくなれり



病みつかれねてばかりゐる小さき子をそつと起  
して見する庭の面

赤子の如く少し匍ふようになりしとてよろこぶ  
吾子に金魚を見する

よくなれて別れを惜しむこの子故ひるねのあひ  
にかへる看護婦

病あがりものほしがり**の**強き子を慰めかねて時  
計のみ見る

しどくど降りくる雨にぬれにけり目さむる如  
きひなげしの花

枇杷の實のうれたるをもて吾子の遊ぶ庭の木立  
の夏めくあした

このまひる木にも草にも静なる陽のかゞやきて  
音なき天地

落葉より淋しきかげと見てなきしひなげしの花  
のけふもこぼるゝ

京・筑紫

尼僧院一夜ごまりしあけがたの池のはちすの花  
ひらく音

むかし見し琵琶湖の風のなつかしきその一夏に  
忘れ來し人

水の音を聴きつゝ友と語りたる夜半もありたり  
川添の家

鴨川の岸邊の柳別れ來し月日のごとく忘れぬ  
かな

水鏡見し面影も忘れず京の疏水のあけがたの  
ころ

いのちありて再びとらむ御手ならじ鴨の川原の  
夕ぐれの町

水の音飛びかふ螢二つ三つ暗に聲なくしづみ入  
るころ

近江路やかゝる夜なりき月なくてあかるき湖の  
やみに光れる

京の人いそまあるかなけふも来て魚をつるなり  
疏水の岸に

隣り家に織る西陣の機の音はたと止みけりまひ  
るのあつさ

みぞろが池たゞ氣味悪う動かざるその水の面おも魔  
の如き淵

袷かへてだらりの帯もしめずてふ消息の来て三  
年はすぎぬ

京なまり亡せにし人のおもかげのうかびくるな  
り日ぐらしの聲

京はかの逢阪山に別れ來し落葉の音も思ひぞい  
づる

虫の音をきゝつゝ泣きしこともあり筑紫の國に  
われすみしころ

沖の火やとかく涙に見しころのその思出にけふ  
もなかるゝ

水に落つる道の灯影の冷たかり筑紫の國の川添  
の家

吾子

金魚うり子がききつけて門の戸の鈴うちならし  
いでゆく足音

背丈のびし吾子に心のひかされて夢も現も二人  
となりぬ

西方に紅き雲あり子の指せば何かはるけき心ともなる

傍らに吾子といふもの眠らせて女子の幸を知りそめぬわれ

子を見れば戀さへ名さへ忘れたるやうに在おすがやゝ淋しけれ

今日といふ運命のくるわかれ路のその日のことも語り合ひぬれ

京へゆく話もやがて三年ごし久しやといひて淋しう笑む人

無花果のけふは熟れしと見にゆけばはや子等のとりにあとかたもなし

午後三時遊びに行きし子等二人吾を呼びながら  
かへる足音

祖母がする朝々の心經を吾子も覺えて口ずさむ  
なり

生れ來しちいさき人の片笑くば三日日にして見  
出でたるかな

みどり子の泣きて止まねば次々に家中の人に抱  
かれ渡る

よりくればはたと泣き止むみどり子は我足音を  
きゝ覺えたる

抱かれて人形の如く眠る子のその口もとよ我父  
に似る

一  
静にも吾子の眠れる枕邊の蚊帳の外のみぎりぎりの聲

三六

子等にきかすこのまりうたも悲しやな母ならぬ人を母とせし頃

相よりて命をたのみたのまれて三年を越えぬこの秋の風

秋の花や子とそひふしにいくとせの夢も涙もわすれ果てにし

泣くほどの悲しみもなく死ぬほどの恨みもなく  
てこの秋の月

汽車のおもちやつみ木の山の次々に吾膝もどを  
めぐる雨の日

三七



悲しみは果てぬ涙はぬぐはれぬ吾子と皮むく栗  
の味ひ

三八

大きくなりしを己が手柄である様に背のびをし  
ては見するをさな子

南向き日向の縁に坐りつゝ子と遊びけり猫もか  
たへに

懐 舊

むかし見し七月の陽のあるときのその磯の香を  
戀ひわたるかな

岩清水落ちて冷し西瓜つけて君を待てりと消息  
の來ぬ

三九

唯一人の友なる人もいやとほく別れて久し七月  
のほし

傳習の辛きを君もしるやらむと言ひもはてすに  
涙する人

横たはる銀河のながれけふばかりしみぐと見  
ぬ遠方人と

わが庭に餌をあさりくるにはとりのけはひかも  
すれまなつのまひるを

よひの雨いつか嵐となりにけりしづまりくるも  
わが胸のうち

庭前の萩そよぐにぞ驚かるあわたしうもすぎ  
し三年よ

身にあまる憂きかす／＼をおきて來し彼方とばかりわすれはてにき

秋となりまた水の出に大川の流れの音にまじる人聲

訪れし寺の尼僧の留守のまをなきつゝゐるも木かげのこほろぎ

鐘の音しづかに闇に消えてゆき十月のそら星まばらなる

訪なひて主まつまを大銀杏一葉ちりけりまた一葉散る

秋風のごとく淋しくおとづれし友の額にかゝる前髪

涙ふき心に何か思へよと落葉ぞさわぐ夜のとほ  
そに

四四

三年ごしの病弱といふこの人の淋しき床に虫の  
聲する

虫の聲木枯さへも吹きまじり心さえたる此宵な  
るかも

老女

吾の娘なりしころまめにつかへくれたる

老女ありき思ひ出づるに昨日のごさし

姫様よまたおいたしてとたしなめし老女の聲の  
いまでも聞ゆる

四五

五十三次かごでゆられて來しといふ老女に抱かれ寝ねしいくこせ

田舎源氏國貞ゑがくの錦繪もはるけくなりぬ十六の春

やしきづとめの老女がきかするおせん茶屋のおせんのかほを幻に見し

御家流をいみじく書きし人なりきわが手習の双紙のはしに

行儀作法言葉づかひもやかましく斯う御意なされといひし人はも

生きてあらば親のやうにもしてやらむと思ふ人なり幼き思出

何かしらす不思議の夢に育てられしいとけなき  
日よ物語めく

兄と姉ふたりを親となつかしみ涙せし日もあり  
にしものを

満月

みどり子の眠れるひまをわがものご机によれば  
眠たくなれり

むづかる子なだめて門に出でたれば屋根の上な  
る満月紅し

静かなる吾子と添寝のまくらべよ落葉のさわぐ  
音はすれども

父と母と子等と四人がけふあらむその日のため  
のある日のおもひ

子らよ母はかうしたお月様に泣いたのよと無言  
に語る小さきものに

わがつまのかへりおそきも嬉しかり癒えたれば  
こそと思ふがゆゑに

襖ごし吾子の眠りをのぞき見ぬ机によれるわが  
手の冷たさ

吾子をつれ日毎遊べる狐塚けさ霜白く置き初め  
にけり

夜の風わが衿もとの冷たさよ急ぎてかへる町の  
四つかど

かへりおそきわれを待ちかねいねし子の枕べに  
おく小さき包

おごそかに神に仕ふる心して病兒をまもる夜の  
床の上

冬ごもり久しくなりて門を出ぬ子はけふもまだ  
咳のなほらぬ

留守の間を待ちくたびれて子の泣くになだめか  
ねつと電話のくるも

二つの乳はりて痛めば話さへ耳に入らずて家の  
子をおもふ



自動車の早き歩みももどかしく乳兒のなくやど  
いそぐかへり路

みどり子は飢ゑて泣くやど乳みつる胸を抱きて  
家に急ぎぬ

雪の日やとかくむづかる子を抱きてさむき間ぬ  
ちに湯氣たてゝ寝る

新聞賣る孝行息子にけさもあへり寝ざめし吾子  
をあやしつゝ來れば

友とゐて話はずめり云ふ言の今絶えて聞く川の  
水音

背負はれてかへる吾子の冷き頬乳房あつるには  
たと泣きやむ

梅の花一つ二つと數へつつ目のあたゝかし小雨  
ふりきぬ

我生けるこの世に生きてある人と思ふばかりに  
ふと涙せし

人形

人形の我手にかへる不思議さを奇蹟のごとくあ  
きれてゐたり

人形よとてもあへぬとあきらめしその日のわれ  
の辛きおもひで

五年ぶり我手にかへる人形に頬すりよせて泣きぬ子のごと

子らにさへ手にふれさせず人形を抱きてしばし思ひぬ昔を

人形はかへれり子らは二人あり何淋しまむわが  
家君が家

追憶の春

鴨川や向ひの岸の灯の色を見て涙せし春のこしかた

その時のなみだと思ふ大空の雲のあゆみの目に  
とどまれば

幾とせか淋しき春を見て泣きしわが若き日の山  
櫻花

祇園町紅き女の前かけの四つ角に消ゆる春の夕  
ぐれ

櫻雨ぬれてかへさにふと見たる人形みせの女の  
まゆすみ

にせむらさき田舎源氏の繪もやうの光ひかるの君きみをば  
戀しと思ひし

母にさへ云はぬさびしさ十六の少女の胸におぼ  
ゆるさびしさ

まじくとわが顔見ては涙して玄關先に立ちゐ  
し友よ

ともすれば三世相などくりひろげ吾に教へし老  
婆を憶ふ

六二

十六やまことの母にあらずよと初めてしれる悲  
しきおどろき

母とのみ思ひ入りたるわが母の生さぬ仲ぞとし  
りし悲しみ

碧き水岩にせかれて雪とちる保津川べりの悲し  
き思出

やまみづの間なく時なく流れては巖を洗ふ千古  
の姿

水底にあかるき月の光あり浅瀬にしづく小石も  
見えて

六三

洗髮干すと日向の縁に居れば丁字の花のにほひ  
て来るも

おん病なほらばともに詣らむと誓ひては來ぬ産<sup>うぶ</sup>  
土<sup>すな</sup>の宮

やみこもる君を思ひて晝ながらみあかしかゝぐ  
御堂の奥に

ちぎりおきし君とならではゆかじとて今年の花  
も葉櫻となりぬ

君病むに身のいとしさも忘れけり花は咲くとも  
花はちるとも

君病めばよも日もあらず初夏の若葉の風も淋し  
き心地す

にはとりと犬と子供と遊びゐる春のまひるの我  
家の庭

八重櫻ちりこぼれたる朝庭にはだしの吾子の泥  
はねかへす

山吹の青枝たわゝに動く見ゆ小さきすすめの身  
じろぐたびに

遊 女

吉原の遊女が呉れし長き文讀みもてゆくに涙ぞ  
おつる

我は女如何にしてみましたにの人を助くるすべもし  
らぬ口惜しさ

嵐つよく雷さへも鳴る時を冒して來ぬる悲しき  
客人

しどけなき伊達卷姿これやこの幾多の人にまかせたる身か

一よさに幾人枕かはすかときく人のありわれ耳を蔽ふ

吾れ小さき子を抱きてあるに生涯を母となり得ぬ身ぞとも云へり

子を生まむ健康さへも失へりこの人のいふ年  
二十一

二十一年よりませて世の中の男を呪ひ世を呪ふ  
ひと



尼 僧

七〇

いと若き京の尼僧の懺悔文おもて面を伏せてわが泣きにけり

懺悔文見るにいたまし偽はられ菩薩のごとく拜がみてありしか

かの人にこのあやまちのありてこそいよよ親しも佛の御弟子

罌 粟 の 花

けしの花いちじるしくもこき朝をふと見れば空に小雨のふれる

去年植ゑし牡丹の苗木この年も又蕾もたず青葉しにけり

七一

朝早く吾子を抱きて門に立てば新聞賣のあやし  
てゆけり

吾子のため植ゑし桐の木丈高く屋根をも越えぬ  
いとすくよかに

あやまちもなくて育てし五年をよろこばしやと  
子の頭撫づ

子煩惱かくなりはてゝ戀しとも淋しともなく友  
と離るゝ

吾をまてる吾子の愛かなしき顔二つ目に浮び來も早  
く歸らな

階下に吾子が猫よぶ聲のしてしづかなるかな六  
月まひる

人の来て物語るまもまつはれる子にひかされて  
心おちゐず

七四

郊外にわれ住なれてたまさかに街に出づればた  
だ騒しき

自動車の過ぎゆくあとの砂ほこり浴びて暫を物  
思ひける

相許す心とこゝろ今にして思へば戀し幸うすき  
身も

相會はずされど許せる心もてしづかに思ふへだ  
たる人を

つま在<sup>ま</sup>さぬ一人の家に子とあればしづかなるま  
まにむかしをおもふ

七五

かの日にもたゞ笑ましげに我を見しうつしゑな  
りき父のおもかげ

塚の人生きてむかしは吾をよびしその聲戀しお  
くつきどころ

長き間我と涙をとみにせし紅き珊瑚の珠數やこ  
れども

涙もて法華經よみしかの國の遠き思出に今宵泣  
かまし

静かなり遠き昔の思出を泣くによろしき五月雨  
の音

五月雨やきのふもけふも陽を見ねば子はむづか  
りて霽間を慕へり

有明の月かすかなり鳥なく高きけやきの森より  
ひくゝ

七八

朝もやの深きかなたの町つゞき電燈の光あはく  
残れる

牡丹花のくづるゝ音すかそけくも物いひけらし  
静かなるかな

梅雨晴

乳のみ兒に胸さはられてめざめけりけだるきま  
ゝの午睡のまどろみ

やけ砂のごろにまみれてゐる金魚子がもてあそ  
び死なせたるならむ

七九

廣告屋の太鼓の音もおもしろく聞え来るなり梅  
雨はれし朝を

乳母車を木かげにおきて本よめる子守のそばに  
犬もねむれり

俄雨傘も持たずてかへり來し吾子のひたひの冷  
きしづく

海邊にて

潮早きおんごの瀬戸を越えて來ればま晝となり  
ぬ須磨明石瀉

警報の赤き旗今日はおろされて風静なる燈臺の  
庭

蒼き海松の木のまに見えそめて冷き風の前髪を  
ふく

まひるどき帆船一つのかげもなく晴れ渡りたる  
海と空かな

青空に一つの鳥の飛べるなく帆かげもなくて淋  
しき濱邊

一つ二つ漁舟の浮かぶ午後の海涯（はて）なる空に雲も  
動かす

七月のまひるの巖に一人たてば足こそばゆし渦  
巻く荒波

波荒き岩角の上にひとり居れば心たゞならず肌  
のつめたき

たたずめば昔おもひし死の魅惑こゝにしてあり  
波の音悲し

ふるさとの家はうられぬ築山のかげの入日は誰  
が見るらむか

葵の花また咲く頃をふるさとに逢はむと云ひし  
人の思ほゆ

盂蘭盆

はらからに追はれたる身も亡き父の御魂來ます  
と灯をかゝげゝる

はらからに追はれて今はひたぶるに亡き父戀し  
魂祭する



灯ともせば傍かたへに父のある心地久しう泣かぬ涙ぞ  
おつる

八六

七月の御魂祭の嬉しさは父の來ますとひたに思  
はれて

子病む

面瘦やする子の顔見つゝ悲しけれ夢に現に吾はひ  
かるるに

乳ふくむ唇熱しむづかりて母を離さぬ子を如何  
にせむ

八七

子の病めばわれも病みぬる心地してひねもす吾  
子とともねをぞする

八八

熱高き子のいたつきにいねられずこよひもきゝ  
ぬ夜半の二時を

食べそめておかゆ三つほどかへたりときゝてよ  
ろこぶ今朝の食卓

夏になれば海へ山へと子を思ひ夜業なごをすなり吾  
は人の親

ふたりの子吾故生きて育つかと見つゝ涙する夜  
半もありけり

子をもてば母の心に足らひぬる女の幸のあはれ  
なるかな

八九

雛二つ生れしことを一大事の起りしやうにふれてあるく兒

ひよこ二つに家中の者の集りて何すともなしに一日くらしぬ

貫ひ來し犬の仔泣けばわが床に入れてやらむと兒のなだめある

兄の乗る三輪車のあとを犬の仔の追ふに小さきが手打ちよろこぶ

二人の兒いとすこやかに泣き笑ふその日くゝに生ける汝が母

足らぬものなしと思へり兒等ふたり泣き騒ぐ中に吾を見出でて

蚊帳中にふたり兒並び晝寢する傍らにして吾は  
物縫ふ

早寢せる兒の枕邊に買ひて來しおもちやを並べ  
父の遊べる

兒に乳をふくまする時何かしらすかすめて走る  
まぼろしのかげ

子を欲しと愁ひて泣きしそのかみの思出のあり  
添乳の床に

一つをば口に一つを手に持ちつ母の胸乳に足ら  
ひぬる顔

添乳しつゝ子守唄をばうたひたればふしぎに泣  
かる泪の出でて

唯一人汽車を走らす吾兒のかほ逐はれし兄に似  
ると思ひき

九四

うつし繪を誰ぞと問はれよそ人と兒に教へけり  
わがはらからを

稻 妻

いなづまの光るたび兒はおのゝきてひしとすが  
りぬ夕やみの中

雷の遠くへのきて夕立のはれゆく空に月のうご  
ける

九五

兒を抱きて夕立のあとの庭に立てば木の雫して襟のつめたき

兒ら二人おもちやをかさじかしてよと争ひのはてを高く泣くこゑ

階はし下に子らの争ふ聲のして泣けばともぐく母をたづぬる

犬の子と猫さひよこと生きものゝ友をあつめて兒は遊び居り

あけくれのわが營のうらやすさは夢かやと思ふ日のあり

用あればと乳をまさぐる小さき手をのがれて來たり泣くを後に

泣く聲を後に聞きて用に立てり乳に縋らむといふ兒をおきて

母は忙し汝と遊ばむ暇もなしと云ひて來にけり泣く兒を置きて

兒ら二人並ぶ晝寢の蚊帳の邊に物よみながらうたゝ寢をする

愛し兒らよ濱邊に貝をひろはせてやらむと云ひつふた夏は經し

この夏は病む人もなくて房州の濱邊に行かむと地圖ひろげたる

立ちてみつ居てみつ暑き日盛りに豆腐屋の聲の門にきこゆる

むし暑くねむられぬまゝに團扇もて兒をあふぎ  
つゝ夜を更かしたり

停電に灯を失へるくらがり  
に兒ら騒ぐなり吾を  
よびつゝ

停電に蠟燭の灯のほのあかり間におきて語りあ  
ひけり

五年ぶりぞ電車の驛の人ごみに逢ひて別れしそ  
のうしろかげ

汽車の窓ゆ見ゆる野山のけしきだにうらめづら  
しく久に旅する

雨ふれば柿の木の葉のかさなりの雫する度そよ  
ぐ涼しさ



青き葉の重りあひて晝は見えぬ柿の實あまた灯  
ともせば見ゆ

用事ありて母は留守よといつはりてのがれ來に  
けり二階の机に

下の部屋母は留守よといふ聲の小さきがきこゆ  
一人笑まるも

寧樂路にて

あり經たる古きなげきは忘れたりそのいやはて  
のいまの安けさ

たゞ一夜とまりし奈良のはたごやの西瓜の味を  
ふご思ひ出づ

十三のその折に見し手向山その後の夢も悲しき  
ところ

わが涙さそふと見たる北山のその雲に似しが丘  
の上にある

はるく遠きを思ひ岸に立てばかろき愁のふ  
と流れ来ぬ

らんぶつけし街道筋の田舎家におもひぞ出づる  
幼き日の夢

われは今思ふことなき日に逢ひぬ親里持たぬ子  
とはなれども

年長く求めくゝて今ぞ足るこのよろこびも告ぐ  
る人なし

思ふことおもふがまゝになりていまふしぎに浮  
ぶ來し方の夢

後の日のおもかげを見てちかひしがその日とな  
りてわれ年老いぬ

思ふことなきにつけても嬉しとし告げなむ人の  
なきが寂しき

いとしきにつけてかなしき人の上あはぬも嬉し  
見ぬも安けし

過ぎし日を憶へば口惜しひとりもつこのよろこ  
びに世をはばかりて

やう／＼に今の齡を経てしより母となりぬるわ  
れのあはれさ

蚊帳ごしに見る月かげも冷くて木立のあたり霧  
立ちのぼる

丈高きけやきの枝にわが心幼き頃の武藏野を追  
ふ

ラヂオのいふ天気豫報を口まねて語り聞かすも  
五つの兄が

秋 立 っ

雲はやし折々月のあらはれて照りかけりする初  
秋のそら

秋風や吾を育てたる品川の磯の香戀し人の訪は  
ねば

村岡氏の令息の死を悼む(十首)

いねられず友の一人子魂<sup>たま</sup>失せて眠るその顔見て  
來し夜は

君が書きしおとぎ嘶の本なごも棺に入るゝか見  
るに得堪えず

朝な夕な語り聞かせし「紅うばら」兒に持たせや  
る君が心はも

母と兒が並びし床の空しきを思ひやるなり我も  
人の親

あすよりの寂しき胸を思ひやる心に悲し夜の雨  
音

吾にさへけさは冷たき秋の風抱く兒亡せし友の  
ふところよ

長月の夜の夢悲し一人兒の喪に籠る君がひろき  
間のうち

自動車のおもちやよと吾兒に持ちて來しその愛  
らしき優しき聲はも

紺がすり着たる男の子のその姿目にちらつきて  
夜は悲しき

秋の蟬しきりに鳴きて庭の外をもち竿かたげ似  
たる子のゆく

風強し軒のひさしのトタン屋根にしきりに柿の  
落つる音する

嵐のあさ柿の實あまた落ちたるをふみころばし  
て子らの遊べる

嵐なぎて照り渡りたる日のかげの木々の雫に光  
る涼けさ

柿の實の紅きに雨のしづくして静なるかな日曜  
のひる

柿盗人道にすてたる澁柿の齒形を見ればほゝ笑  
まれけり

くりや邊に味噌汁煮ゆるかほりして朝の寢床に  
見ゆる蒼空

悲しきは思出ばかり今にして子らを守りつゝお  
もふことなき

かつて吾が心あくがれたづねたるその日は來ぬ  
れけふの安けさ

月を見て指さす小さき吾兒の手に思ひぞいづる  
 そのかみのうた

つくづく法師啼きて木かげに秋立ちぬ小袖縫ふ  
 手に針の冷たし

隣よりかくれ遊びに来る子らの肩に袂に萩こぼ  
 れ散る

歸りおくれ乳の痛むをひとり秘めて電車待つな  
 り家の兒思ほゆ

外出より歸れる吾兒は冷き頬胸乳にあてゝ乳を  
 むさぼる

まことこれ吾が兒と思ひ抱きしめて乳ふくま  
 する胸のぬくもり



ひる寢よりさめし吾が兒の呼ぶ聲に見れば初め  
て座りてゐたり

兒を抱きてうらの畑に来て見れば雀群れ立つ音  
のはげしく

死にわかれ生別れたるはらからも一つになして  
偲ぶ夜の雨

兒は早も乳をすひつゝ眠りけり近火にさめしお  
ごろきの中

ほのくくと明るくなればみどり兒は早も眼ざめ  
ぬ吾はねむたきに

御濠の水の面に映る松かげに幼きわれのふと見  
ゆるかな

賣れ残る魚屋の店の魚の背の青く光るなり電燈  
のもと

外の面より歸れば走り吾が胸に手をさしいれて  
あたゝむる吾子

ひとり兒を喪ひし友を慰めて林檎剝ぐ手の冷き  
ひえかも

霜月ころ

霧深み野とも山とも見えわかぬ奥より聞ゆる明  
鳥の聲

はるく武藏野を走る電車かも霧の奥より汽  
笛の聞ゆる

板廊下ふむにつめたきけさの霜庭の柿の實一つ  
残り

一一三

子の爲に靴下のやれつくろはむ暇ある日の嬉し  
きころ

嬉しさを云はむとしてはのぞきをり外出の吾兒  
が軽き足ごり

兒等をみな遊びにやれば静まりてま晝ひそかに  
物の音なき

騒ぐ兒を外にやりしが寂しきに心落ちるす机に  
よれご

泥足に上るを叱れば犬の子に頬すりよせて兒は  
泣きて居り

一一三

富士見坂下れば昔わが見たる護國寺の森の幼き  
思出

丸ビルの二階のはしの曲り角ふと遭ひにけり昔  
の友に

そこまでと云ひて送りつ電車道の狭霧の中に人  
と別れぬ

君をのせし省線電車いと深き夜霧の中に走り入  
りたる

兒を抱きて裏庭ゆけば掃きあへぬ落葉たまりて  
足に音する

より添へばひしとすがりて笑みし吾兒早も眠れ  
り添乳の胸に

かへりおぞきあるじ待つ間の夜の寒み炭つきそへて雨の音きく

知らぬ人おびただしくもあるものか夜の停車場にまじるわがかげ

人を送る停車場道のもやの中に言葉とならぬ思ひぞ侘し

肌寒むやしめ忘れたる窓によりふと見ればこよひ十五夜ならし

降り出でし雨のいつしか雪となれり客人かへす夜の八時頃

湯もらひの人も今宵は遂に来す雪にくれゆく淋しき家内

工場の建物のかげのうすじめりさくくくと音す  
足のつめたき

工場の夜更けの灯りまさみしくあかくとして  
人聲もなき

工場の煙突のけぶりたそがれて夕日斜にあかく  
うつれり

こゝろよき疲を覺ゆ吾兒として町よりかへる夕  
ぐれのやど

吾兒と寝む宿と思ひてこのからだ置くに安らふ  
炬燵のぬくもり

手まくらのかひなのしびれにふとさめて見れば  
静けき兒の眠りかな

知らざりし幼き時のよろこびを兒らにはさせむ  
と新年を待つ

新しき年をまつにも生き甲斐を知りぬ幼き兒ら  
あるがため

御大葬にあひまつりて

刻々に悲しきことを耳にしつ夜は明けてけり十  
二月二十五日

大正の御代の畢りと今日の日を誰かは知らむ暗  
きしのゝめ

日も蔽へ月も蔽へとなげくなる國民の上にこの  
年もゆく

力強き昭和の御代をたのみつゝ涙はてなし神去  
りませば

御病弱に在す帝ときくにさへ悲しかりつるきの  
ふにもあるかな

聖上御腦篤き時、二位局水垢離さらせ給ふときにて

老いませる君が苦行を分たむとわれ水浴びぬ霜  
凍る夜に

ひそやかに苦行をわかつ心にて水かゝる時涙ぞ  
落つる



老い延びてこの悲みを國民のなげきの上に見つ  
る君はも

一三四

大正の御宇に死ぬべきいのちをさなげかせます  
かさびしき夜の雨

### 諒闇の新年

大あめつち憂と涙にくれはてゝ年改まるけさの  
しづけさ

昭和二年このあかつきのしづけさをたのみまつ  
れと陽のかゞやくも

一三五

萬物の冷えはてし世にあるごとく大東京は物の  
音もせぬ

ゆく人の胸の喪章も目にしみてきのふのなみだ  
またあたらしき

いぶかりてたづぬる兒等に何と云はむ正月とい  
ふに松もたてねば

この兒等が大きくなりて世にたゝむ昭和の御代  
ぞたのみまつらむ

仰ぎ見る日はひとつぞとかしこみて昭和の御代  
の初春を見き

冬ながら暖き日のしづけさを兒等の遊びに入り  
てくらすも

一三八  
兒等の爲に生きむとぞおもふそのかみは悲しき  
ことを希ねがひたれども

花まつり

雪に更けし夜をひそやかに人戀し憶おもひぞいづる  
床の紅梅

知らぬ人の身の上話きゝながら慰めしらでわれ  
も泣きけり

子とあるに昔も人も忘れけり隣の屋根のちひさなる月

かせひきて子のやすみたる間のうちに髪解かずして三日はすぎぬ

病みあがりたべものゝことのみいふ吾子にかくれてたぶるおそきひる飯

待ちあはす人まだ見えぬ停車場の群衆の中のさみしき一時

やゝさみし心のまゝになりていましみじみ泣かむいとまさへなき

兒らはまだ起きてまつやと生垣の間より覗くわが家のあかり

一四二  
買ひて來しおもちやをならべわがつまはねむれ  
る子らのそばに遊べる

よごれたる袴を氣にして人にあふいまのおもひ  
はこのほかになき

おもちや屋の前にしばらく立ちとまる母なるわ  
れをガラス戸に見し

天華ふるこの日よりして人の世は法のめぐみに  
うるほひしとぞ

遠つ祖おやのなせるがごとくわれらまた花折りかざ  
しけふを祝はむ

花の雨みめぐみのあめもふりそゝげ地上は春に  
人は浄土に

夜は八時はや床に入る幼子となれては母もねむ  
たくなれり

地震のあと壁のひゞきをつくろひしその張り紙  
にのこるおもひで

隣家に飼へる鶯きのふよりけふはひとしほほが  
らかに啼く

久々に訪へるうれしさ折からに音なく春の小雨  
もふりて

嬉しくも花の梢をながれ來し風こちよき夕く  
れのやど

下駄はきて外に出しやるよろこびを子にも母に  
もうばふ雪ふる

真夜中にめざめたる子をあやすとてききぬ冷き  
雪折の音を

ぬかるみの道のまなかに動かざる自動車ひとつ  
人かげもなし

くりや女が物洗ふ水の音ばかり人影もあらぬ留  
守の家かな

急ぐべき仕事をもちて子と遊ぶ電車ごつこのい  
らだゝしけれ

わがうたに詠まれし櫻久に見すちりてこぼれて  
またやさくらん

知らぬごち席をならべていふこともあらず日永  
き汽車の旅かな

待ちわびて泣くかとおもふそら耳に兒の聲ぞす  
る日もくれたれば

子とねむる床のぬくみのこゝろよし朝の寢ざめ  
の春のそよ風

京の春わが若き日の思ひでの中にまじりて花は  
こぼるも

この世にてふたゝびあはず三條の四つ角にして  
わかれしすがた

名もあらぬ小草もそだつ夜の雨わすれし人も涙  
しぬらし

筑紫路や楠の大木をみどりするなみだもありき  
初夏のあめ



おもほえず涙みちきぬ子らふたり芝生の上に相  
抱く見て

はるばるとつゞく線路のこの末に東京のありと  
思ふうれしさ

まろうごは向の家かわが家かとしばし見てあり  
生垣の外

音高くそらにきこゆる飛行機の姿は見えす雲低  
う垂る

子らのみな眠りしあとのしづけさよやうやうわ  
れにかへりし心地

思出はちぎれちぎれにかへるなり乳母が家に來  
て浪の音きけば

京の春筑紫の春にゆきくれてたどりし夢のなほ  
やすからぬ

一五二

夏 草

子を守りて門邊に居ればあはたゞし降るかとは  
かりちる櫻かな

見なれたる庭の木立のいつやらに若葉の伸びて  
風そよぐなり

一五三

ゆくりなく見しはこよひのおぼろ夜に別れし人  
と思ひいづらく

かしら下げておじきをすれど物云はぬ人見てか  
へる夕ぐれの町

ちらと見し姉の姿の忘れかね子をうながして早  
寝をぞする

春の日に冷き雨の降るごとく思ひもよらぬ淋し  
さを見し

木の下の涼しき風をよびながら青草の上を子に  
あゆまする

茂りあふ高き樹立の間より一坪ほどの蒼ぞらの  
見ゆ

夏樹立木にも草にもみなぎれる力ぞうれし子ら  
の上にも

一夜ぬるかりのやごにも子とあれば淡き旅愁の  
うかびくるかな

一の子を家に置きてははたごやに一夜寝るもこ  
ろ落ちぬ

みづみづし大ぞらの雲もかげうつす夕立のあと  
の水たまりかな

つなぎたる糸をそのままねむれる子そと離しつ  
ゝ蜻蛉を逃がす

子とあれば心幼しかちまけも本氣になりてさい  
ころをふる

雨あがり俄にのびし柿の葉の小暗きまでになり  
ぬ庭もせ

釣りそめし蚊帳めづらしみ見らふたりなかなか  
いねずさわぎてゐるも

齒痛にも食べぬ子をかなしみて顔うちまもり  
吐息しぬわれ

伊香保にて

旅つかれに早寝をすればはたごやの隣にきこゆ  
をとことをんな

身のほごもしらですごせし十六のその思出の戀  
しきどころ

伊香保山雨さりてゆく山の端のあかねの色に日はたそがるゝ

一つ星月のまうへにあらはれてあかるきそらに何の鳥かなく

立札に海拔何尺としるされしその驛々の文字をたのしむ

深く吸ふ山の空気の冷々とすみとほりたるあまきあぢはひ

物聞山まのあたり来てそのかみの親はらからもおもひいづらく

目には見つ手にはとりつゝめづらしむ六月といふに山櫻かな

身じろげばさとこぼれたる山の湯のその音のよ  
さそのころよさ

赤城山榛名の山とつぎつぎにわがしれる名をき  
くがうれしき

谷川の流の水もそのむかし聞きつる音ぞとたち  
とまりけれ

いとけなきわが俤もうつしけむ山のはざまの水  
たまりかな

隣り家の尺八の音をめづらしく落ちつきて聞く  
子らのるすのま

添乳してひとねむりせるまくらべにつまかへる  
らし門の鈴なる

唐松を曲りてすこしこなたへといふ聲ぞする谷  
のあなたに

いづことも月の姿は見えなくにあかるくなれり  
庭一面に

ふとさめて見ればとも寝の兒は居らす何の太鼓  
か門にきこゆる

『何すとしてわれは生れし』子をもちて思ふ暇さへ  
なくてとしふる

おじぎすれごふりむかざりしその人の俤ばかり  
目にはしみぬる

ものいはで別れし姉の姿をば同じ所に來てまた  
おもふ



ゆきゆけば海近きかも波の音の自動車のまごに  
聞えくるなり

傘をうつ雨音はたどやみにけり仰ぐ大木の下の  
ほそみち

ひる寝かやねむりし吾子の手を離しひそかにぞ  
立つ夕餉のしたくに

夕やけの早くも消えて夜はきぬ子を遊ばせてあ  
りし小山に

電車のりてごこかへ行こといふ子らをなだめ  
てあそぶ雨の日の午後

早くつりし蚊帳の裾をはためかしやがてふりき  
ぬ大粒の雨

尼僧院ひさよなれどもあけのかね夕の鐘に寝ざ  
めするかな

小さき手をとつゝいそぐ畑道屋根よりひくき  
夕月のあり

添乳しつゝいつかねむりしまくらべに置きてあ  
りけり二つの西瓜

青かやの裾に来て啼くきりぎりすきのふの涙わ  
くゆふべかな

ごりのこしまたあすは來むご枇杷の實を子のポ  
ケットに入れてやりけり

垣の外を通る子供に枇杷の實をとりてあたへて  
われもうれしき

砂山をよろこび水をめづらしみ遊びほうけて母もたづねぬ

雨近み雲のゆきゝのたゞならず風起るなりこず  
ゑこずゑに

上の子が妬みて憎むいもうとを時たま抱けばあ  
はれなるかな

ともし灯をけしてまねきし月のかげひとりし居  
るにおもひでのよき

向ひ三軒夜更くるまゝに一つ消え二つ消えゆく  
まごあかりかな

湯もらひのとなりの人のおそく来て水流す音の  
家内に高し

廣告屋の太鼓の音をきゝつけて我背にぞよる三  
つのふき子は

二つ三つ青き柿の實地に落ちて子のるすのまの  
しづかなる庭

今日の日もくるゝに近しおそくせし洗濯物はま  
だ乾かぬに

留守居

かへりまつにあらぬ此宵の門の鍵十時といふに  
はやしめて寝る

灯ともせばはやもねむたし夫あらぬ家内しづま  
り物音もせぬ

淋しければ鼠のはしる音にさへ怖ぢて三人がわれにより添ふ

白き雲北へながれぬと見る門に郵便夫がもつ夫の消息

南京の陣中にゐる夫のこと思ひつゝよる座敷のはしらは

常にはいはぬ父のことなご云ひいでて病めばや泣きて兒の父を戀ふ

幼きにいふてきかせて合點さすよすがは遠し上海のまち

子らの寝れば皆人いねて音もなし夫あらぬ家の夜更のはやき

淋しきの身の置きどころかへり来てたたみの上  
にまろねをぞする

たまたまに吹きくる風も秋ぞかし高田の馬場の  
夕やけのいろ

遊びうみてかへらむといふ子歸らじと泣く子の  
ふたり母をあらそふ

むしのねのさみしきゆゑか兒ら二人わがふとこ  
ろに首さしいるる

こほろぎのあまり淋しくなく故にいふことをよ  
くきくふたりかな

あまつさえ雨ふる夜なり虫の音もその日のごと  
くなけば淋しき

おそくかへる夫をまちつつ夜業する電燈の下に  
啼くきりぎりす

一七八

放 想 (一)

朝化粧五月となれば京紅のあをきひかりもなつ  
かしきかな

美しき戀唄うたひ灯のかげに舞はましものを銀  
扇かな

一七九

▽ 羽子板の押繪の君と添ひ臥しのはるやむかしの  
おぼろ夜の月

むかし見しやうなる雲はうつつな  
の思ひをのせて  
いづくにはゆく

あるときの少女のこころ母ごころ  
親しみそめし  
女のなさけ

いのち死ぬ人のむすめにももとせ  
の後を誓へといひ  
まじし人

▽ 若き日も美しき日もくれはてて  
こひの外なるかな  
しみぞ湧く

わびぬれば庶人のなかに雑らひて  
おどけたる眼に見ものとなるよ



初夏や白百合の香にいだかれてぬるとおもひき  
若草の床

花と花うすくれなゐとむらさきとうなづきあふ  
は何のこころぞ

筆をもて吾はうたはじわが魂といのちをかけて  
歌生まむかも

わか經たる涙の味はこの人らゆめしらゆなとか  
けてぞいのる

十八の乙女可愛やゆるもなくただ人まねの哀歌  
をつくる

女ども戀によく似るかたらしひの文なども來ぬあ  
りのすさびに

わが顔に似るといふにもいとほしさ笑ましきほ  
どの人まねもする

わが魂は吾にそむきて面見せずきのふもけふも  
さびしき日かな

ゆきわかれやがてはいまの死わかれこのなみだ  
をもはぐくみし人

▽君おもへば戀のめでたきそれよりもなほうつく  
しきなさけをぞ思ふ

けふの日も我ある世なり天地にこのあるわれか  
何ををしふる

ここの亦都こひしのおもひ川なみだのあとをた  
づねてぞ來し

ふれがたきこころとしらで近よりし身より我が  
世のたそがれは來ぬ

嘲りも痛罵もいまはよろこびの聲ときくまで世  
なれ人なれ

われはもと花の床なる土くれのあらざりし日を  
おもへとてこそ

人形に戀をゆるしぬたらちねはいとけなき日の  
小さきかいなに

日ぐらしのなけば筑紫はいと淋しわすれしこと  
もおもひいだされ

戒律をまもるといひてわかれてはまた口惜しう  
あへる人かな

雲水の笠かたぶけて行すぎしそのよこがほよ誰  
にかも似し

人の身は神の宮ぞとをしへられかみのみやゆる  
悲しくおもひし

三會院の萩の上風身にしみてわが世の外のよに  
もすみにき

うもれはてし我半生をとぶらひぬかへらすなり  
し十六乙女

夕さればあかるきそらの三日月のそのいとしさ  
もわれにありきや